



218号

2016 / 11 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



休日の南湖公園は人がいっぱい。公園の一角に遊園地みたいな施設があって多くの親子連れで賑わっています。そこに通じる道端に白い紙型でできたオブジェに静かに色を塗る親子を発見。

(中国遼寧省瀋陽市、南湖公園にて 2016年4月)

撮影：満柏(日中水墨協会会長)

‘わんりい’ 2016 年 11 月号の目次は最終ページにあります

今年は、秋口に雨が多く、合間の晴れた日は、いつまでも暑いような気がしていましたが、10月も半ばを過ぎると、朝夕は、薄ら寒く感じる日も出て来て、そんな日に私は、1辺が50cm足らずの絹のスカーフを首に巻き付けます。

「絹のスカーフ」と言うと上等な品のようですが、これは、北京の観光客用市場でそれなりのお値段で買ったものですから、余り上等とは言えません。それでも一応「絹」ですから、手触りが良く温かいので、愛用しています。

スカーフは、もう10年以上前に買ったものですが、数をたくさん買って、あれこれ取り替えながら使うので、10年経ってもあまり古びず、結構重宝して、買った当時を思い出して、楽しんでいます。

これを買ったところは、建国門近くの秀水市場と言うところで、もともとは、絹織物を扱うお店が集まって、秀水街と呼ばれていた地域でした。1990年代後半に行った友人たちは、丁度浅草の仲見世の様に、小さな店が平面的に軒を連ねているのを、冷やかして歩いたそうです。しかし、私が行った2000年代初めには、上野のアメ横のお店がビルの中に納まったように、ここにも大きなビルが建って、それぞれのお店がその中で営業するようになっていました。

何軒かのお店で値段を聞きますと、同じものを違う値段で売っています。一軒では一枚60元、他の一軒では50元、もう一軒では1枚60元だけど、3枚買えば50元にすると言いました。それで、このお店で値段の交渉を始めました。

3枚なら一枚50元と言うので、10枚買うから一枚20元にして、と言うと言下に「ダメ」と言います。ま、20元はやり過ぎか、と思い直して、30元ならどう？と言うと、「それでは儲けが無い。40元なら売ってあげる」と言います。そこで、「じゃあ他の店で頼んでみる」と行きかけると、「しょうがない、30元で良いよ」と言って売ってくれました。

後で聞いた話では、この買わずに立ち去るふりをするのが、値下げをさせるのに、一番効果的なのだそうです。口では儲けが無いと言いながら、本当は売っ

た方が良いので、もう少し交渉して、少しでも高く買わせようとするのです。本当に儲けが無かったら、引き留めて売ろうとはしません。買手としては、安ければ易いほど良いのですが、あまり安く言うのも己の品性が疑われるような気がして、つい一歩ひいてしまいます。この場合も、本当は、一枚20元で買えれば、達成感が増して、本当に良い買い物をしたと思ったのでしょうか、20元で押し通すのはちょっと「あこぎ」ではないかと自制心が働いて、30元で承知してしまったのでした。

それでも、本来60元の品物が半額の30元で手に入ったので大満足でしたが、通いなれた友人は、「20元で待つべきだった。どうしてもダメと言ったら、15枚買うから、と言えは20元になったはずだ」と言うのでした。彼女はさすがに、交渉の呼吸が分かっている、スマートに負けさせる方法を良く知っていました。このような交渉は、やはり場数を踏まないと、急には身に着かないと感じました。

日本では値引き交渉等したことが無いので、こんな経験が嬉しくて、何回も同じようにしてスカーフを買ったので、友人達にかなり配っても、手許に随分残り、十年以上たっても、働いてくれています。

当時は元が安かったので、日本円に換算すると随分安く買えましたが、北京の物価も安いので、売り上げの金額としてはかなりの額になり、お店としてはこんな値段で売っても、儲けはあったのでしょう。しかし、北京も最近は働く人の賃金がかかなり上がって、スカーフなども仕入れ原価が上がったでしょう。今は、こんなスカーフはいくらぐらいで買えるのでしょうかね。

元が高くなって、昔程、買い物の楽しみは無くなりましたが、この値引き交渉は楽しいものです。次回北京へ行ったら、久しぶりに、この秀水市場か、天壇公園近くの紅橋市場に行ってみようかと思っています。最近では地方から北京へ観光に来る中国の人達も多いので、こんな市場の雰囲気も随分変わったかもしれません。それはそれで、今の中国を知り、どんなふうになったのかを垣間見る良い機会になるでしょう。

Rén ér wú xìn, bù zhī qí kě yě
人而无信，不知其可也

人にして信なくんば、其の可なるを知らず〈為政第二〉

うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授／孔子学院講師 植田渥雄

前にも取り上げたことがあります、『論語』には「民信無くんば立たず」〈顔淵第十二〉という言葉があります。「政治とは何か」と、弟子の子貢から質問されたとき、孔子はこうに答えました。この言葉には、政治にとって、民衆との信頼関係は軍備よりも重要で、場合によっては食糧よりも重要だという意味合いが込められています。

信頼関係が重要なことは、何も政治に限ったことではありません。友人間でも信頼関係が重んじられます。『論語』には次のような言葉もあります。「吾日三省吾身。为人谋，而不忠乎？与朋友交，而不信乎？传不习乎？」(Wú rì sān xǐng wú shēn。Wèi rén móu ér bù zhōng hū? Yǔ péng yǒu jiāo ér bù xìn hū? Chuán bù xí hū?)」(吾れ日に吾が身を三省す。人の為に謀りて、忠ならざるか、朋友と交わりて、信ならざるか。習わざるを伝えしか、と)〈学而第一〉。私は一日に三回わが身を反省する。人の為に事を企てた時、真心をもって行なったかどうか。友人と交わった時、信頼関係を築けたかどうか。十分習得していない知識を他人に受け売りすることがなかったかどうか、と。

これは孔子の愛弟子の、親孝行で知られる曾子の言葉です。これを見れば、友人関係においても「信」が重要視されていることがわかります。曾子は、孔子の言葉を忠実に伝えた人なので、これを孔子の言葉とみなすこともできます。

孔子自身は次のように言っています。「人而无信。不知其可也。大车无輓。小车无軌。其何以行之哉！」(Rén ér wú xìn, bù zhī qí kě yě。Dà chē wú nǐ, xiǎo chē wú yuè, qí hé yǐ xíng zhī zài!)」(人にして信無

くんば、其の可なるを知らざるなり。大車に輓無く、小車に軌なくんば、其れ何を以てか之を行らん)〈為政第二〉。人として「信」がなければ、どうやって、まともで居られるのか。私にはわからない。大小の馬車に輓や軌がなければ、どうして馬を走らせることができようか、と。輓も軌も馬と車をつなぎ合わせる楔のことです。これがなければ馬車は走れない。人間にとって「信」とはそれに似たもので、これがなければうまく生きていけない、というわけです。

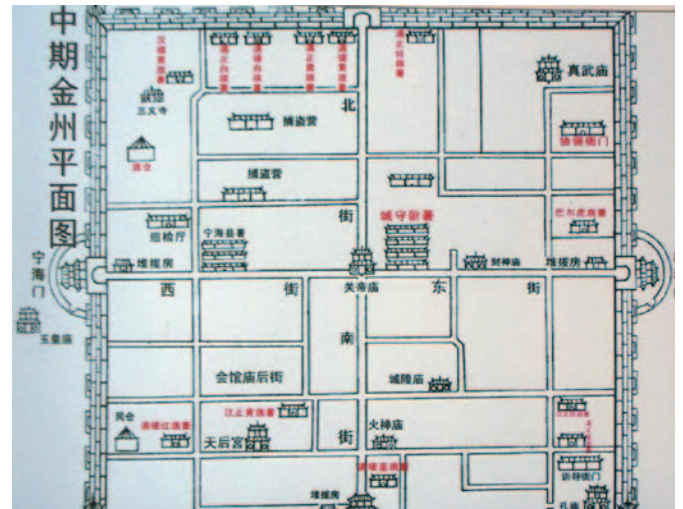
また、これは仕事の上での上下関係についても言えます。『論語』には、次のような言葉も見られます。同じく孔子の愛弟子で、学問で名の知れた子夏の言葉です。「君子信，而后劳其民。未信，则以为厲己也。信，而后谏。未信，则以为谤己也」(Jūn zǐ xìn, ér hòu láo qí mín。Wèi xìn, zé yǐ wéi lì jǐ yě。Xìn, ér hòu jiàn。Wèi xìn, zé yǐ wéi bàng jǐ yě)「君子は信ぜられて、而る後其の民を勞す。未だ信ぜられざれば、則ち以て己を厲すと為すなり。信ぜられて、而る後諫む。未だ信ぜられざれば、以て己を謗ると為すなり)〈子張第十九〉。人の上に立つ者は、信頼関係があって始めて、人に困難な仕事をさせることもできる。そうでなければ、相手は酷い扱いを受けたと思うに違いない。信頼関係があってこそ、上司にも直言することができる。それがなければ、相手は非難されたと思うだろう。

まずは信頼関係を築くことから始めよう。仮に正しいことを行い、正しいことを言ったとしても、ただそれだけで良い結果が得られるというものではない。信頼関係がなければ、逆効果にもなるということです。(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

2回目は、8月26日に行った「金州」についてである。金州という街は、ご存知の方は少ないと思う。この街は、行政上は大連市の下部組織ともいえる「金州区」に位置付けされており、大連の中心部からは約30キロメートルのところにある。下部組織に甘んじているが、その昔は遼東半島の軍事上の要の街であった。今はなくなったが四方城壁に囲まれていた。以前連載していた「都市めぐり」で大連市の紹介をしたが、「金州区」は取り上げていないので今回詳しく紹介したい。

大連市は、歴史に刻まれる年月はたかだか100有余年しかなく、それ以前は農村、漁村であった。日清戦争(1894～5年)後の下関条約に対して三国干渉でロシアが遼東半島に触手を伸ばし、1898年から大連・旅順の街づくり、港づくりに着手して以来歴史に登場した街である。一方金州は、清の時代は後述する「金州副都統衙署」という海防のための役所が1843年に設置された。その時よりずっと昔から金州城があり、ひとつの街を形成していた。

金州城の城壁や街の形は、ネットによると12世紀に女真族が建国した「金」のころから造り始め、清(1644年～)代に完成したと有る。500年以上の期間を要したことになるが、当時はいろいろな民族が入り乱れ戦乱の多い時代であり、また女真族の人口はあまり多くないので、すこしづつ造り上げていったのであろうか。ネットを疑うわけではないがそれにしても500年は長すぎると思う。いずれにしても当時の城壁の写真をみると大変立派である。この場所はすぐ近くの「南山」とともに日露戦争の攻防があった場所である。日清・日露戦争を経ても城壁や城門は残ったが、文化大革命(1966年～1976年)の時、すべて壊され



旧金州城平面图。上方が北。

(大連「金州副都統衙署」にて筆者撮影)

てしまったという。中国各地でこの10年で貴重な文化財が数限りなく無残にも取り壊された。大変残念である。金州城も今残っていれば重要建築物に指定されたかもしれない。

ここですこし横道に入りたい。金州の南山といえば、年配の方は日露戦争時の「南山の戦い」と乃木將軍と將軍の詠んだ有名な漢詩を思い浮かべる方が多いと思う。南山は私も大連で勤務した時に友人に頼んで山頂に立ったが100m余りの低山である。この山にロシアは近代的な陣地を構築したため、それを占拠しようとした日本と激しい戦闘となった。地図で見ればお分かりと思うが、この地は遼東半島の隘路になっており重要な戦略拠点であった。1904年5月26日、奥大將の率いる第二軍はロシアの倍以上の死傷者を出しながらも攻略に成功した。この戦闘で第二軍に属していた乃木將軍の長男の勝典は戦死したのである(次男・保典は旅順にある203高地で戦死した)。第三軍の司令官であった乃木は、6月7日旅順に向かう途中南山に立ち寄り、勝典が亡くなったところを悲壮な気持ちで眺めながら次の有名な漢詩を詠んだ。



旧金州城南門(満州大博覧会写真帖 1933、絵はがきから)

金州城外作 乃木希典

山川草木轉荒涼，十里風腥新戰場。

征馬不前人不語，金州城外立斜陽。

この漢詩には、逸話がある。乃木はこの詩をはがきに書いて友人を通じて、当時「漢詩中興の祖」とも言われた野口寧斎という詩人に添削を請うた。しかし彼は一字も訂正しなかったという。なお南山の戦いは以上の通りであるが、金州城は第四軍が三度目の攻撃でようやく陥落した。

ここで私が今回の大連旅行でなぜ金州を訪問したかを改めて述べると……

私は、わんりい 207号(2015年10月号)から9回のシリーズで「元寇と鷹島」について書いてきた。連載する中で、元寇の周辺情報を提供して下さった友人のMさんから新たな情報を教えていただいた。それは元寇に関する石碑が旧金州城北門跡にあること、さらに元寇とは直接関係はないが、金州に「金州副都統衙署」や「石河烽火台」などの歴史的な遺跡がいくつか残されている、ということを知っていただいた。ちょうど8月下旬に大連を訪問することにしていたのでこれらを見学した上で、わんりい紙上に何らかの形で報告し、記録に残したいと思ったのである。

さて金州に入り、まず旧金州城北門跡に立っているという石碑を目指した。この石碑であるが、Mさんがある図書館で「元寇の新研究(池内宏著、昭

和6年刊行)」の中で、〈……支那側の新資料としては、大正14年遼東半島金州城の北門外に於いて珍しい碑石が発見された。至元十八年(弘安の役)に従軍した元の東路軍の百戸張成の墓碑銘があった。発見者は岩間徳也氏……〉という一文を見つけられた。百戸とは百人を統率する部隊長のことで、張成という部隊長が弘安の役において志賀島周辺で戦った行動記録が石碑に刻まれているわけである。弘安の役の東路軍は、朝鮮半島南部の合浦(今の大韓民国の馬山)から出港しているが、軍の編成は蒙古軍、漢軍、高麗王国軍である。蒙古軍に征服されて配下となった遼東半島から朝鮮半島にかけての民族は弘安の役の東路軍に従軍させられているわけで、張成部隊長もその一人であろう。

その日、一日中運転してくれた中国人の友人が金州城の北門はこの辺りであったはずだが、と言いながら近所のお年寄りに聞くと我々は間違いなく北門跡近くに來ていることが分かった。しかしその周辺はちょうどマンションの建築中で付近の道路には土砂が積み上げられ、道路も塞がってこれ以上近づけない。付近に違う石碑でも、と思って見回したが見当たらない。金州区の役所が工事前にどこかに移したもののなのか？ 折角ここまで來たのに残念でならなかった。

ところが後日、Mさんがやはり大連に昔住んでいた人と話した中で、その石碑は今は旅順博物館にあることが判明したのである。貴重な石碑であるので旅順博物館に運んだものかもしれないが、実は金州にも「金州博物館」という立派な博物館があるのだ。1958年に完成した同博物館入り口横の「金州博物館」碑は、文学者であり歴史家の「郭沫若(1892～1978年)」の揮毫である。「百戸長成墓碑銘」の場所が分かったので、来年あたり旅順に行こうかと思っている。

次号は引き続き金州の見どころについて書き進めたい。

(続く)。

今日は漢詩の世界で詩聖と崇められる杜甫の『蜀相』という詩を学びました。蜀相とは蜀の宰相ということで、三国志で劉備を助け活躍した諸葛孔明を指します。

杜甫はなぜ諸葛孔明のことを詩に書いたのでしょうか？

今日の講義は一枚の中国古代地図を頼りに杜甫その人の人生を辿るお話から始まりました。詩聖と呼ばれ1500首もの作品が現代に伝えられている杜甫ですが、その人生は苦労の連続でした。杜甫の活躍した時代は唐の最も盛んな時期、玄宗皇帝の時代です。同じ時代に、杜甫より少し前に唐王朝に仕え、宮廷詩人として活躍した李白がいます。玄宗皇帝は詩歌や音楽を愛する大変な文化人でしたので、常に優秀な人材を求めていました。しかし、玄宗皇帝は晩年、楊貴妃にのめり込み、だんだんと政治力を失っていきます。杜甫が宮廷に仕えたいと希望したときには、玄宗皇帝は杜甫の才能を認めつつも積極的に登用し優遇するだけの力がありませんでした。

「もしも、玄宗皇帝が楊貴妃を愛さなければ、李白と杜甫は玄宗皇帝の左右に仕える宮廷詩人として活躍したかもしれないけど、そうなれば皇帝を讃えるような詩ばかり作ってかえって面白くなかったかも知れない。悲劇的な現実があったからこそ、素晴らしい詩が生まれたと言えるよね」と植田先生。

日本人で知らない人がいない杜甫の代表作『春望』は安祿山の乱が起き、玄宗皇帝は蜀に避難し、杜甫が長安で軟禁状態になっていた時に書いた詩だそうです。玄宗皇帝の死後、息子の肅宗に仕えましたが、ソリが合わず左遷され、ついに家族を連れて流浪の人となります。旅の途中飢えで苦しんだりしながら、何百キロに渡る旅を続け、かつて孔明が本拠地とした蜀の地、今の四川省の成都に辿りつきました。そこで孔明を祀る廟を訪ねた時の詩がこの『蜀相』なのです。

蜀 相

作者：杜甫

chéng xiàng cí táng hé chù xún
丞 相 祠 堂 何 处 寻
jīn guān chéng wài bǎi sēn sēn
锦 官 城 外 柏 森 森
yǐng jiē bì cǎo zì chūn sè
映 阶 碧 草 自 春 色
gé yè huáng lí kōng hǎo yīn
隔 叶 黄 鹂 空 好 音
sān gù pín fán tiān xià jì
三 顾 频 烦 天 下 计
liǎng cháo kāi jì lǎo chén xīn
两 朝 开 济 老 臣 心
chū shī wèi jié shēn xiān sǐ
出 师 未 捷 身 先 死
zhǎng shǐ yīng xióng lèi mǎn jīn
长 使 英 雄 泪 满 襟

成都で数年暮らしたのち、岳陽から今の長沙に行き、杜甫はそこで生涯を閉じました。享年59歳。

生まれは名門の出、祖父も宮廷詩人でした。7歳から詩を書き、14歳で社交界デビューし、当時の著名人たちと酒を酌み交わしながら詩を書いていたという天才少年でした。しかしその後科挙の試験に失敗します。プライドの高い杜甫はその後科挙の試験に挑戦し続けることはなく、あくまで自分の才能を時の王朝で発揮したいと詩を書き続け、名門貴族たちに送り続けるという、凄まじい程の情熱を傾けて就職活動をしたのですが、成功することはありませんでした。その後、玄宗皇帝の発案で、一芸に秀でた人材を拾い上げるための補充試験がありました。杜甫も応募しますが、時の権力者の横やりで、全員不合格になってしまいました。それでも杜甫は詩を書き続けます。

何故そこまで詩作にこだわったのか？ そこには杜甫の理想がありました。玄宗皇帝から詩の才能を認められて側近に加わり、理想の政治を実現したかったからです。「致君堯舜上」、これは杜甫の詩の中に出でてくる言葉ですが、自らが仕える皇帝を、古

の聖君主の誉れ高い堯帝と舜帝以上にしたい、という意味です。つまり、杜甫はナンバー2の地位でトップを育てたいという、いわばドン・キホーテのようなとてつもない野望をもっていたのです。

これが、諸葛孔明への尊敬に繋がるのです。孔明と言えば、三顧の礼に応えて、劉備に仕えました。そして、劉備の死後も息子の劉禅に仕え、その生涯、忠誠を尽くしナンバー・ツーに徹した人物なのです。「中国ではナンバー・ツーこそ最も素晴らしいという観念が昔からあって、偉大なるナンバー・ツーになることが杜甫の理想だったんだね、だから孔明の生き方が理想と重なったんだね」と植田先生。

孔明については、「孔明と言えば『三国志演義』の赤壁の戦いで神がかった活躍をしたことで有名だけどね。『レッド・クリフ』という映画にもなって…。でも、アレはウソだから…。杜甫が知っている孔明は、千古の名文『出師の表』に見られるような、忠誠を貫いた人。息子にトップの才能がなければお前が後を継げ、という劉備の遺言にも乗らず、劉備の愚昧な息子劉禅を支え続けた偉大なるナンバー・ツーなんだよね」

中国文化の中のナンバー・ツーの美学、そうか、古代の、国と国の争いは宰相の知恵比べみたいなものだったなあ、トップは頂点に立つ才能がいるけど、ナンバー・ツーに求められる高度な資質は確かにナンバー・ワン以上のものがあるかも、と腑に落ちました。

だからこそ、杜甫は自分の感情を詩に吐露するというより、常に天下国家を想い、先んじて民を憂うという、儒教の基本的思考を優先したのです。それが詩聖と呼ばれる所以だそうです。

また杜甫の詩は自伝でもあり自分史でもあり、当時の政治、社会、文化を記した歴史資料でもあるそうです。そこどころが、同じ大詩人といっても、李白と一味違う、ということだそうです。

「杜甫の面白いところは試験に落ちているところだね～。李白はそもそも科挙を受けていない、王維は一発で合格した人。でも詩人としての順番は、1

位杜甫、2位李白、3位王維…。こういう話は若い学生にウケるよね。あと、唐の時代は平均的な優等生よりも、個性が重んじられた時代だった。たった一首の詩だけで、千数百年後の歴史に名を残すことになった人もいましたね」。人間杜甫を巡る盛り沢山の内容の締めくくりに、植田先生の漢詩への想いと学生へのエールがストレートに伝わってきました。

この詩は七言律詩というスタイルで書かれています。字数は五言絶句の倍ですが、李白は絶句を得意とし、杜甫は律詩を得意としたことから、〈李絶杜律〉と言われるそうです。李白はフィーリング人間、湧き上がる感情を短く鋭く鮮烈に吐き出すのを得意とし、杜甫は自分の考えをまとめてじっくり伝えるタイプ。両者の個性が対照的なのが面白いですね。

律詩は韻と平仄（声調）の規則がきっちりと決められており、「碧草」と「黄鸝」、「三顧」と「両朝」など対句を入れたり、平仄を字句の前後で合わせるなど、七言×八句の詩形に、計算されたハイテクニクが散りばめられています。また表現の上では、

「空好音（空しくも美しい音色）」という、空しさと美しさを一つの言葉にしている所に杜甫のセンスが光ります。小鳥の美しい音色を残すだけで、かつての英雄はもう居ない。しかし英雄への尊敬の念は永遠に後世に続いていく、というところに救いを求めているんじゃないかなあ～」。

植田先生の解説で詩人の心がグッと身近に感じられました。何千年も昔に生きた古人の想いが感じられる瞬間は、横たわる膨大な時間の川が消えて無くなるような錯覚を覚えます。

杜甫の律詩には法則の乱れがほとんどないそうで、そこにも杜甫の誠実かつ周到で真面目な人柄を感じます。生涯四人の妻をもった李白とは対照的に、一人の妻を最後まで愛したところにも杜甫らしさを感じます。

今日は、死後に詩聖と崇められるようになったものの、苦難に満ちた生涯を過ごした、杜甫の人物像と実人生にじっくり迫る豊かな時間を堪能しました。

ここで歴史をもう一度戦前の日中関係に戻して、日中戦争の中において活躍したエスペランティストについて語りましょう。その名は長谷川テルという女性です。テルはエスペラントに関心ある人たちの中では、その名を知る人はいるでしょうが、一般的には、その存在を認識している人はほとんどいないでしょう。しかし長谷川テルは、ザメンホフが言う人類人主義を文字通り実践し活動したエスペランティストでした。テルこそ、真にエスペランティストの名前に値する人だと私は思います。

➤ 日中間の不穏の中、中国に渡る

長谷川テルは、1912年(明治45年)3月、山梨県の猿橋(現在、大月市)に生まれました。その後一家は東京に移り、テルは東京府立第三高女に入り、奈良女子師範学校の国文科に進学しました。今の奈良女子大学です。

世界では年ごとに不穏な動きが広がっていました。1931年9月18日、柳条湖事件が起きました。“満洲”と呼ばれていた中国東北部にいた日本の関東軍は、瀋陽北方の柳条湖付近で、中国軍が“満鉄線”を爆破したとして一斉に攻撃を開始しました。しかしこれは関東軍の自作自演でした。関東軍は翌日までに満鉄沿線の主要都市を占領しました。日本ではこの事件を満洲“事変”というような言い換えをして本質を隠しています。

この事件こそ、〈日中15年戦争〉の起点になった事件でした。私は数年前、柳条湖に行きましたが、そこには歴史博物館が建ち、その正面の壁面には江沢民の字で、〈9・18を忘れるな〉と大きく記されていました。

日本は翌年には、“満洲国”を建国しました。テルはこのような時期に青春を過ごしました。奈良女高師に入学したばかりのクラスには中国からの留学生

が10人ほどいましたが、彼女たちは中国に帰ってしまいました。

その頃テルはエスペラントを学び始めました。宮武正道という人が指導者でした。彼は生涯、在野に

あってマレー語やタガログ語などの南洋語、南洋文学の研究者であり、奈良エスペラント会の創始者でした。そしてテルは、日本プロレタリア文化連盟と接触、そのメンバーは検挙され、テルも警察に連行され、退学させられました。

東京に戻ったテルは、エスペラントを通じて劉仁という東京高等師範学校(現在の筑波大学)に留学していた中国人青年と知り合いました。劉仁は“満洲国”からの官費留学生でしたが、彼はザメンホフの人類人主義を信奉するエスペランティストでした。二人は友情を結び、恋愛し結婚しました。テルは父親の大反対を押し切り結婚したのです。

日中戦争という言葉はまだありませんでしたが、太平を謳歌する時代ではありません。劉仁は中国に戻ります。しかし故郷である中国東北(“満洲国”)の本溪に戻らず、上海に渡りました。その後テルも上海へ渡りました。1937年の4月、盧溝橋事件の3か月前のことでした。

先に15年戦争と呼びましたが、これは鶴見俊輔が、満洲事変から支那事変、大

東亜戦争を一連の歴史過程として捉えて、日本の中国に対する戦争責任を明らかにしたいという思いを込めて名付けました。しかし、それまでは日中間に大規模な戦いがなかったことから、この盧溝橋事件を日中戦争の始まりと位置付ける知識人がいます。ともあれ、日中間の本格的な戦争が始まる寸前にテル夫婦は、日本を離れて中国大陆に渡ったのです。

➤ エスペラントを使って闘うテル

1937年4月15日、テルは上海に降り立ちました。埠頭には劉仁が待っていました。上海ですぐ目

第八章 エスペランティスト長谷川テルの人生
「混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義」「私は人類の一員だ!」

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおい よしひろ)

にしたのは近代的なビル群、そして上半身裸の苦力（クーリー）の男たちの姿でした。

テルと劉仁はフランス租界に部屋を借りて住みました。中国と戦争状態にある日本の婦人であることを隠すために、劉仁と友人たちはテルをマレー生まれの華僑で、今回初めて中国に帰ってきた女性であり、マレー語しか話せない、ということにしました。そのマレー語とはエスペラントです。

劉仁と友人が時局問題などのパンフレットを出す仕事場に行くと、テルは家主の家の小さい娘たちと遊ぶ以外はすることがなく退屈な毎日でした。孤独でもありましたが唯一の憩いの場所が共同租界にある上海世界語者協会、エスペラント協会でした。テルは時々ここを訪れ、日本から持参したタイプライターを持ってきてエスペラントの雑誌「中国は吼える」(チニーオ・フルラス)の刊行を手伝いました。

盧溝橋事件から1週間後の7月15日、上海世界語者協会は、エスペラント運動50年を祝う記念集会を開催、テルも劉仁と一緒に参加しました。そこには300人以上の同志たちが集まりました。「エスペラントを使って中国解放のために」という上海世界語者協会のスローガンの下、集まった同志たちはエスペラント語で「ラ・エスペーロ」(希望)、「ラ・タギージョ」(あかつき)というエスペラントの歌を唄いました。

中国のエスペランティストたちは中国語で「義勇軍行進曲」を唄いました。この作品は劇作家である田漢が作詞し、聶耳ニエアルが作曲したものです。この歌は、戦争中に中国人民の間で広く歌われ、新中国になって国歌として制定されました。聶耳は1935年、ヨーロッパへ行く途中に日本に立ち寄りしましたが、鵠沼海岸で水死しました。田漢は1916年に日本に留学し、郭沫若らと行動を共にしました。が、その後文化革命で批判され、68年獄死。二人は、残念ながら不慮の死に遭ったのです。

▶「売国奴と呼んでください」

1937年7月28日、日本の陸軍は華北で総攻撃

を開始し、8月13日には海軍が上海で中国軍に攻撃を加えました。8月15日には、日本政府は南京政府を「断固懲^{ようちやう}する」という声明を出し、首都南京を攻撃しました。それを見たテルは日本のエスペランティストたちに公開の手紙を書きました。

友人知人に、検閲を思って手紙を出せなかったことを記した後、このように書きました。

「みなさん、自分がどんな民族に属していようと、人間らしい心明晰な理性をもっている人ならば、かならず中国に同情するでしょう。私は畜生ではありません。私もまた正義について学びました。それで、私の頭から、たえずつぎのような疑問がはなれないのです。——いったい、私はなにをなすべきなのか？ある同志たちのように、戦線におもむくべきか。それとも、婦人の同志たちのように難民や戦傷兵たちのために働くべきなのか。

しかし、私にはそれはできません。なぜなら、私は中国語を話すことさえろくにできない無力な女性なのですから。

たださいわいにして、私はエスペランティストです。そうです。「さいわいにして」と私は言います。なぜなら、私がこの日本帝国主義と戦う革命的な闘争のなかに小さな持ち場を見つけることができるのは、エスペラントのおかげだからです。(中略)

私がペンを手に入れば、心のなかには抑圧された正義を思う熱血が煮えたぎり、野蛮な敵にたいする怒りが火のように燃えあがるのです。また、私の心は中国の民衆とともにあるという喜びに満たされるのです。

お望みならば、どうぞ私を売国奴と呼んでください。さっても結構です。私は、これっぽっちもおそれはしません。むしろ、私は他民族の国土を侵略するばかりか、なんの罪もない無力な難民の上に、この世の地獄を現出させて平然としている人びとと同じ民族のひとりであることを恥とします。ほんとうの愛国主義は、人類の進化とけっして対立するものではありません。でなければ、それは排外主義なのです」。

東西文明の比較 (9)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

大変興味ある記事から始めたいと思います。10月5日の読売新聞が1面に載せました。

「奈良市の平城宮跡から出土した8世紀中頃の木簡に、ペルシャを意味する“破斯”^{はし}という名字を持つ役人の名前が書かれていたことがわかった」。赤外線撮影をした結果、「役人を養成する大学寮で働いていたペルシャ人、破斯清道の勤務記録であることがわかった」。という記事です。天平神護元年(765年)という年号も書かれているそうです。ちなみに、「続日本紀」には736年、遣唐使が唐の人

三人、破斯一人を日本に連れ帰り、聖武天皇が会ったと記されているそうです。遠い昔にペルシャ(現イラン)との直接交流があったことにロマンを感じました。

さて、10月号では私たち日本人の祖先である縄文人の築いた伝統が、今も受け継がれているということについて書くと述べました。そこで本題に戻ります。

🏠「定住」と、その定義

人類の歴史を考えると、最初の“革命”は、石器の発明です。その次は、“火の使用”でしょう。三番目に「定住」といわれます。この人類史上画期的な変化が縄文文化を生み出し、現代の私たちの生活の基礎を形作ったのです。ここでその「定住」を定義づけてみます。

縄文人は「平坦で陽当たりが良く、周辺で水が確保でき、種類や量が安定した食料が他の集団と競合せずに入手できる場所を、自分たちの集団規模に合わせて定住の場として選定した」。これが、定住の最低条件です。そうした場所を選び、居住用の

竪穴住居を整備し、ゴミ捨て場や墓を築きました。石器や原石の貯蔵場を持つ遺跡も存在しました。縄文時代の早期(1万～6000年前)には、日本列島全体にこうした遺跡が広がりました。東北地方から以南では、クリを栽培し、その貯蔵庫跡も発見されています。

🍲鍋料理を生んだ「土器」と「弓矢」の出現

縄文土器は12,000年前には一般化しました。土器の出現は、現在のところ、世界最古といわれています。そして縄文人は「煮炊き」することを思いつきました。気候の温暖化が進み、食料が豊富に入手できるようになりました。ワラビやゼンマイといった山菜から、ハマグリ・マガキや海藻類、ニホンジカ・イノシシを初めとした鳥獣の肉を「煮炊き」しました。この「煮炊き」は、現代日本の「鍋料理」として引き継がれています。

また、狩猟具の発明もありました。旧石器時代人が使用していた石槍から「弓矢」へと変革しました。旧石器時代の狩猟の対象はナウマンゾウやオオツノジカ、ヘラジカや野牛、ヒグマなどの大型獣でしたが、気候変動により本州ではこれらの大型獣の姿が消えてしまい、代わりに出現したのが動きの速いイノシシやニホンジカなどの中小型獣です。石器の技術が発達して、小型の石^{やじり}鏃を作るのが可能になりました。「弓矢」の源流は分っていませんが、日本各地で発見される「矢柄研磨器(矢の柄を整形する道具)」が、シベリアやヨーロッパ各地でも見つかっているところから、シベリア経由で日本に持ち込まれたのではないかと考えられます。

最近の日本では、熊や猪、猿などの農作物被害が多発しています。農家の人々以外にも、山菜採りの人々も熊に襲われるなどのニュースが流れます。野獣ハンター(弓矢の代わりに鉄砲)が高齢になって活躍できなくなったことが理由に挙げられています。

どうすれば「動物と人間の共生」が出来るか、縄文人に聞いてみたいと思います。

石器石材の流通と手工業生産

石器の石材、といえば「黒曜石」が有名です。堅くて割れやすく、鋭い刃になります。縄文時代の交易品の代表でしょう。産地が特定できることから、流通経路が分ります。約3万年前の旧石器時代から、半径200～300キロ圏の範囲で流通していたようです。黒曜石の主産地は、全国に70箇所ありましたが、特に有名な長野県の霧ヶ峰高原では、原石や半加工品が貯蔵された状態で発見されています。これは、打製石器の加工地であることを意味しています。すなわち、原料生産から加工製品までを一貫して行っていたことを示しています。ただし、これらの製品の見返り品はなかったようです。利潤を追求する経済行為ではなかったのです。

政府は「地域創生」を叫んでいますが、縄文人が見たら“笑ってしまう”でしょうね。

「干し貝の加工」工場

東京都北区の中里貝塚にあった「干し貝」の加工工場では製品を内陸部へ供給していました。春先にはマガキ、初夏にはハマグリを採取して剥き身や干し貝を大量生産していました。砂地に浅い窪みを掘り、大きな皿を作ってその周囲を薪であぶる。沸騰した海水に貝を入れると貝は口を開き、簡単に剥き身をとることができます。その剥き身を干せば、長持ちする「干し貝」が出来ます。後には、この方法が広まり、千葉県の実積寺や神門貝塚、いわき海岸や豊橋などでも中塚と同じ「工場跡」が発見されています。

原料を多量に獲得して保存・加工・貯蔵して、遠隔地の他集団に供給するシステムがこの時代に完成していたのです。

遠隔地への運搬は「丸木舟」

さすが、海に囲まれた日本列島です。地域特産品は丸木舟で運ばれました。後期旧石器時代には伊豆の神津島や島根県の隠岐島で算出した黒曜石が本土に運ばれていたようです。しかし、実物の丸木舟が確認されたのは縄文時代早期のものです。日

本中の港や湖（琵琶湖）から出土しており、その数は60か所の遺跡から100艘以上の丸木舟が見つかっています。

長さ6～7メートル、幅60センチの大型の外洋の大型船から、長さ3～4メートル、幅50センチの小型まであります。江戸時代の「北前船」の先駆でしょうか。

海外(東アジア)との交流

旧石器時代から東北アジアとの交流がありました。細石刃などの石器に類似性があることが判断材料のようです。しかし、定住生活が安定した後の縄文文化は、日本列島固有の文化として発達したことは間違いありません。

縄文時代は集落間の強いネットワークを持ち、多種類の物品が頻繁に流通していました。

こうした流通は、列島内に限らず、北は中国東北部・ロシア沿海州・サハリン、西は朝鮮半島・中国大陸、さらには日本海から直接ルートで東北アジアへも繋がっていました。

現在のように、国とか民族とかの概念を持たなかった時代では、海という難関はあったにせよ、東西南北のいずれにも歩を進めて交流を図ることは容易であったでしょう。

この交流について、興味ある説があります。交流には、東アジアの自然(植生)が関係していたというのです。大陸をも俯瞰した考えです。

中国は、長江と淮河の中間域を堺として南北に2つの森林地帯を区分けします。南側は常緑のカシ類を中心にシイ類・タブやツバキなどの「常緑広葉樹林帯」。ヒマラヤの中腹からアッサム・雲南の高地、長江以南の江南山地を経て朝鮮半島南部や日本列島西部(中部地方を堺)に及ぶ地域です。これに対して北側の森林地帯を「落葉広葉樹林帯」と定義します。コナラの樹木が中心です。中国東北部からシベリア・樺太、日本列島東部、朝鮮半島北部までを指します。これらの2つの地域内で文化交流が行われていたという説です。

この説については次回に記そうと思います。

■お詫び “わんりい” 9月号の拙稿に下記2か所の誤りがありました。読者の吉川様のご指摘です。

* 日本列島で最古の遺跡は宮城県北西部の江合川流域に連なる「座散乱木・馬場壇・中峰遺跡」で約1万4千年以前のもので、発見された石器にはナウマンゾウやオオツノシカの脂肪が付着していました。また使用痕（動物の角や骨、皮や肉の加工・調理）が認められています。

上記文について：

2000年11月5日、毎日新聞によって「ねつ造事件」がスクープされました。東北旧石器文化研究所副理事長（当時）の藤村新一氏が、自ら穴を掘って石器を埋めていたという事実が明らかになったこと。これによって彼が関係した作業がすべてねつ造であり、従って上記の遺跡および石器に付着していた脂肪についても事実ではないことが判明しました。従いましてこの部分を削除いたします。

* 拙稿の作成に参考にした書籍は「集英社版日本史誕生（佐々木高明氏著）」でした。初版が1991年5月31日です。ねつ造事件発覚以前の出版物でした。とは申せ、

“素人の浅はかさ” 大いに恥じる次第です。お許しいただきたく、お願いいたします。

* 北京原人と同じ原人が日本列島にも存在していたのです。下記は参考記事です。

1968年に、沖縄の具志頭村港川で5～9体分の古人骨が発見されました。18000年前の旧石器時代のものと推定されます。日本最古の人骨です。中国華南の柳江人と類似点が多いと考えられています。おそらく、氷期の海面が低下した時期に、古モンゴロイドの一部が、中国大陸南部から沖縄や西日本へ移住してきたのではないかと推定されています。



イラスト 満柏

◆「わんりい」料理の会報告

中国チマキの巻き方をマスターしよう

講師：宣 芳さん 麻生市民館・料理室 2016年10月10日(祝)

‘わんりい’の活動履歴を見ると、2013年10月に、ご家族が上海出身の郁唯さん講師による中国チマキの講座をした。この時も、郁さんが参加された方たちに丁寧にチマキの巻き方を指導して下さいました。が、やはり不慣れなこともあってなかなかマスターするところまで行かなかった。ならばもう一度中国チマキに挑戦して、今度こそ「巻き方をマスターしよう」ということで、今回は上海出身の宣さんが指導くださった。

用意したもち米9kg、笹の葉500枚。募集人数は15名限定にしたが、事情で来られなかった方が1名おり、結果14名が受講した。宣さん用意の、笹サイズの合皮とチマキ大に生もち米を入れたビニールの小袋でまずは包み方を模擬練習。何回も巻いてみてコツは分ったようなものの、実際、水に浸したもち米を2枚の笹に包む段になると勝手が違うようだった。

宣さんは鮮やかな手つきで、2～3枚の笹にもち米を大盛りにしてくるくと巻き上げる。不慣れた受講生たちは、笹の葉で包むもち米の量を減らし



巻き上がったチマキ

ても、笹の隙間からもち米がこぼれたり笹が裂けたりで最初の内はなかなか手際よくとは行かなかった。が、宣さんが各テーブルを回り、親切・丁寧に包み方のコツをデモして回り、5個、6個と包んで行く内に、形は様々ながら、笹の葉とイ草で巻いた肉チマキと小豆餡チマキ併せておよそ250個のチマキの山が出来た。

ある程度巻き上がったところで、圧力鍋と寸胴鍋



宣芳さんの手元を見つめる参加者の皆さん

で纏めて茹で始め、全部巻き終わる頃には、先に仕込んでおいた圧力釜のチマキが茹で上がった。講座を終えてテーブルの上を片付け、会で用意したサラダと里芋のココナッツミルク煮を自作のチマキと一緒に味わい、試食兼昼食にした。

鍋の中でパンクしたものもいくつかあったが、お湯の中にもち米が流れ出すこともなく、

味の染みたチマキは美味しかった。セイロで蒸すオコワとはまた異なり、おこわとお餅の中間のような、もちりした味わいである。姿も可愛らしく、上手に巻ければお土産としても珍しがられると思う。冷凍もできるので作り置きできる。小腹の空いた時のおやつ、お昼作りが面倒な時の食事用、更には非常食にもなる。肉餡、小豆餡のほか、自分の創意で味付けをチャレンジしてみたい。茹でるのに時間も結構かかるので、作るなら糯米^{もちこめ} 1kgで30個(宣さんは20個くらいらしいが)を一挙に作ろう! その方がきっと上達も早い。

茹でる途中でパンクした小豆餡のチマキを小鍋にとってお粥風にされたのも口当たりが良く、そんな食べ方もあるのかと感心した。保存の一包みを粥にして食べるのも悪くないかもだ。

さて、笹の葉がなくなって、もち米が残ったらど



講師の手つきを思い浮かべながら笹の葉でもち米を包む

うしましょう。ご飯に混ぜて炊飯してもよいのだけれど、この日、洋食専門のプロの男性が参加くださっており、もち米、豚肉、デザート用に切り分けてあった柿と一緒にさっとフライパンで炒め、濡れ布巾に包んで蒸す事30分。柿の実入りのオコワを初めて頂いたがとても美味しかった。そういえば、大連出身の留学生・顧傑君が肉団子にもち米をまぶして蒸してくれた事もある。これもれっきとした上海料理・「糯米丸子」^{ヌオミーワンズ}として知られている。

ご参加の皆さん、どうぞいろいろ試してみてください。

(‘わんりい’ HPに、今回と郁講師のチマキのレシピ、及び郁講師のチマキの巻き方写真あります。

<http://wanli-san.com/cooking/cooking%20title.html>

(報告：田井光枝)



‘わんりい’は、いつでも新入会を歓迎しています。

年会費(4月～3月)：1500円 入会金なし

**郵便局振替口座：00180-5-134011 ‘わんりい’
年度途中からの入会は会費の割引があります。下記連絡先にお問合せください。**

☎042-734-5100 又は E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

✿私のメモに、

『2016・2・8(月) 晴、古刹「東向山築田寺」に招かれる。私共の活動にご理解いただくためにとのこと。タランガッレ・ソーマシリ師に伝えたと同行したいと云われた。寺庭(日本仏教曹洞宗寺院住職夫人をして呼称する) 齋藤美智子様が園長を勤められた『社会福祉法人しぜんの国保育園』『成瀬くりの家』他等を見学後、檀家婦人手作りの料理に舌づつみを打ち、^{よもやま}四方山ばなしが弾んだ。愛語の会『抱き人形』作業場に案内され殊の外感動する。感謝』

と記されている。この築田寺訪問に至ったのは、町田市国際交流センターがらみの恒例のイベント「夢広場」に紛れ込んだ2011年10月30日に機縁がある。温故知新の町田と周知されている通りを歩いていた私は、人盛りのする「ぼっぼ町田」で偶然、日本スリランカ友の会元会員T氏に出会った。畏まった風ではなかったが築田寺住職に紹介されたのである。「ネパールばかりでなく、スリランカに心入れを!!」とお願いしたのはその時のことである。まさか、数年後にこのようなかたちになろうとは。仏様のお導きに相違ない。

築田寺寺報「春号」に、2015年2月9日から15日までの6日間、スリランカの旅が催行され



「愛語の会」の抱き人形製作活動現場を訪れたソーマシリ師

たと載っている。そのツアー行程の中で平和寺とサマハヴィハラヤ住職ソーマシリ師と寺庭が初対面された。抱き人形の制作による二国間交流の主旨を伝え、同行したグループの協力と尽力で、スリランカの女性たちに制作指導されたとのこと。その際、両方で好感を抱きスリランカとの交流が続行可能だと感得されたのであろうか。寺庭である美智子さまは『社会福祉法人しぜんの国保育園』園長を定年退職後、美しい日本語を子どもたちに伝えていくためには、如何にすればよいかとお考えを持たれていらっしゃった。

スリランカの女性たちとの共同で抱き人形を作り、優しい語りかけを伝えていこうと心に決められたのもその為である。そしてその目的で「愛語」グループと名付け活動がスタートした。因みに、この名称は日本仏教禅宗のことばである。四摂法の一つが愛語であり、慈愛の心に発し顧愛の言葉を施すことが示される。それによって徳を積み、生き方の姿勢を正しくして、幸せを実感できるようになる。仏の教えは日本もスリランカも同じである。寺庭の意志である美しい日本語を残すための語りかけの中には勿論、その仏心が込められている。

さて、抱き人形はかつての日本で好まれ、情操教育にも大きな役割を果たしていた。時代を重ねていくうちに、いつの間に消えていったのか。改めて、現在の発案者を辿れば横浜市都筑区に住まれる画家であると聞き及ぶ。前後したことをご寛容いただくとして、前記のツアーに同行されたT夫人を通して、抱き人形の型紙を書いていただき、その型紙を用いてスリランカで4,5体を製作されたとうかがっている。ともあれ、スリランカガンパハ市のサマハヴィハラヤ^注縁^{ゆかり}の女性たちが集い、約40センチ程の人形母体が縫われる。日本に運ばれて、築田寺縁の女性たち、幼稚園保育園のお母様たちやボランティア婦人たちに

よって、体内に綿が詰められ、髪、顔、洋服が着せられていく。服づくりには水玉、ストライプ、チェック、花、草木など多種の柄、模様が使われ、一体ごとに表情も趣も異なる世界にたった一つのお人形が完成する。

可愛いのでお年寄りにも喜ばれそうで、手に取ってみると園児たちに抱っこされおんぶされて丁度いい体重である。この体感が表情を安定させ、心地よさを感じさせる。医学的科学的に観て、子育てに効果があるようだ。加筆させていただくと、築田寺に於ける愛語グループの人形は、T夫人が運んで下さった型紙とは全く異なり、別人? のようにみえる程、創意工夫されている。作り手に任せることで、地域の高齢者方が集うようになって、多面的な効果を生んでいる。私自身、愛語グループの人形の魅力にとりつかれ、何体も買い求めた。この収益は国際支援のために使われ、2015年度10月、サマハヴィハラヤにミシン3台が寄贈されたとのこと。なんと清々しい行為ではないか。ボランティア活動による心の豊かさがひしひしと伝わってくる。

苦言になるが、昨今、生活費を稼ぐボランティアビジネスが罷り通っている。活動リーダーの資質が問われる場合が少なくない。内容が欠如するのに証拠写真を撮っては羅列し、自らの肩書づくりやピーアールに余念がない似非活動者も多々いて淋しい。その観点からも、愛語グループへの活動は素晴らしい。一針一針に純粋な気持ちを込めている。手作りの抱き人形で遊んだ思い出が子どもたちの心の財産となり、温かな愛のある未来へ繋いでほしい。日本・スリランカ両国女性たちによる合作人形が両国の国際交流や支援を含めた友好親善として、町田市の築田寺とスリランカのサマハヴィハラヤ、二つの寺院で「ビューティフル・ボランティア」による絆を深く強くすることが出来たらと思う。

注) ソーマシリ師を住職とするスリランカの寺院。日本名：平和寺。



「愛語の会」メンバー作成の抱き人形たち

「愛語の会」の活動

場 所：「東向山築田寺」(曹洞宗)

〒194-0035 町田市忠生2-5-33

活 動 日：毎週水曜日10時～3時頃

活動内容：築田寺に集まって抱き人形づくりをする。参加者は40歳～85歳。これまでに15か所以上の幼稚園、保育園に人形たちを送っている。



11月3日(祝)にぽっぽ町田のイベント広場で開催される、第19回 町田発国際ボランティア祭・2016夢広場でも販売します。お孫さんへのプレゼントは如何!?

1体1500円(収益は国際支援に使用)

問 合 せ：築田寺(りょうでんじ)

☎042-791-0602

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又'わんりい'の活動についてのご希望やご意見及び'わんりい'に掲載の記事などについても、簡単な感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

フィリピン滞在記 ⑯---フィリピンで誕生日を迎えて

ルソン大学日本語教師 為我 輝 忠

フィリピンでの滞在もわずかになってきた。11月8日に帰国することになっているが、もうあとわずかだ。帰国が間近になると、これまで行っていないところで行ってみたいと思う場所がたくさんあるし、訪ねてみたい人もいる。しかし、この時期になると急にあわたしくなり、やらなければならない、たくさんの残されたことがありすぎて、どうしてよいか分からないくらいだ。

そんな折に私の10月14日の誕生日が近づいてきた。いつもはたいしたこともなく何となく過ぎて行ってしまうが、今年は全然想像できないような誕生日となった。私が教えているルソン大学の学生たちが私の誕生日を祝ってくれたのだ。

フィリピンでは誕生日を祝うことは、その人の大きな節目となるもので、大々的に祝うようである。宗教的な意味合いのクリスマス、復活祭、洗礼式、11月1日のAll Saints' Day(万聖節)と共に誕生日を祝うことは大きなイベントの一つで、宗教的な意味合いはないが、フィリピンの人々にとっては楽しみな日である。この国では誕生日の祝い方が日本とは異なる。日本だと家族を始めとして友人知人たちが祝ってくれるが、ここでは逆に誕生日を迎えた人が周囲の友人や知人たちを招くのである。



4年生の学生と共に

その意味で本来ならばフィリピン流に私が多くの人を招かなければならないのだが、外国からのゲストと言うことで多くの方からお祝いを受けた。今回4つの学生グループが誕生日のパーティを開いてくれた。みな私が教えているクラスの諸君で、それぞれ初級クラス2組(IとII)、上級クラスそしてその上級クラスの有志たちが拙宅でのパーティと近場のリゾート地でのパーティに招いてくれた。

先ずは、初級クラスIIが、誕生日の当日14日は午後3時から4時までの授業はなしにして拙宅にほぼ全員(30名)が集まり、飾りつけや食事の準備まですべて彼ら自身で行ってくれた。始まるまで外で待機してほしいと言われていたので、助手のドミンゴ氏と共に適当に時間をつぶして指定された4時半に戻った。実はこのクラスは15日に近くビーチに行く予定でいたが、中心核のリーダーが大事な用事が入ってしまったために、こちらは急遽中止となり、その代わりに14日に拙宅でのパーティとなった訳である。

家に入って驚いた。テーブルや風船などできれいに飾り付けがなされ、学生たちがわーと現れて、Happy Birthdayの歌声と共にケーキを目の前に差し出してきた。それからが大変である。学生たちとの記念写真が始まった。その後しばらくの間、男子学生が食事の用意をし、女子学生はおしゃべりをしたり飲み物を飲んだりして寛いでいる。1時間くらいいただろうか。食事の用意が出来た。見ると、大きなバナナの葉の上にご飯を載せ、その上やその周りにおかず類が並べられていて、手で食べるのである。30人近くの学生があっという間に平らげてしまった。3時間くらいしてみんな帰って行った。

この日はもう一組のグループが来て、誕生日を祝ってくれた。1年生が帰ってすぐほっとする間も

なく4年生の上級クラスの学生たちが入れ替わりしてやって来た。彼らもケーキを持ってきてくれたが、フィリピンのケーキは甘すぎて一口でもうギブアップである。

翌日は1年生のグループが本来行くことになっていた Burugos (ブルゴス) へ有志の学生たちがぜひ一緒に行きたいというので、出掛けた。美しい Cabangaoan Beach (カボンガオアン・ビーチ) で一日をのんびり、楽しく過ごした。昨日の疲れもあり、あまり動かたくはなかったので、ちょうどよい位であった。

実はもうひとつ、2年生の学生と共に16日に La Union 州の Bauang (バアン) のリゾートへ行くことになっていたが、台風の接近で中止になった。その代わりに翌17日に近場のリゾートへ行くことになった。カラシャオというところにある Resort である。ここでもクラスのほとんどの学生が集まり、私の誕生日を祝ってくれた。

最後に、22日にもう一つのグループが Zambales 州 (ザンバレス) の Candelaria (キャンデラリア) への旅行に招いてくれた。かなり遠いところなので、真夜中の3時出発で、帰宅は夜9時過ぎと言う強行軍で、かなり疲れた。し



4年生の学生と共に無人島へ

かし、ほぼ全員の参加で、日ごろあまり接する機会のない学生とも話をする機会もあり、大いに楽しかった。出かけた先は、ボトランというリゾート地

の沖合にある Potipot Island (ポティポット・アイランド) という無人島で、一周すれば歩いてでも10分も掛からずに回れる小さな島である。

この島で半日のんびり過ごした。みんなで水泳を楽しみ、持参した食事を食べて、これが最後の旅行だとは想像も出来なかった。このクラスにはすでに結婚して子供のいる女子学生が2人いて、今回その一人が子供を連れて参加していた。授業では休むことがなく、

熱心に来ていたので、結婚しているなどとは想像もしていなかった。フィリピンではかなり早く結婚する人が多いようで、「学生結婚」という言葉があるかどうかは知らないが、学生の中には男女共に結婚している例が多く見られる。昨年教えていた学生の中で、子供連れで授業に来ていた学生もいた。

このように私の誕生日を自宅で食事の用意をすべてして祝ってくれたクラスの諸君もいれば、リゾート地へ招いてくれて、そこで一日を過ごすような大々的なお祝いをしてくれたクラスも2組あった。この日は正に「我が最良の日」とでも表現してよさそうな一日であった。



2年生の学生からケーキを贈られる



2年生の学生と共に

中国で一番美しい村・丹巴（旅のお誘い）

『世界の村で発見！こんなところに日本人』（2016年7月26日TBS放映）で紹介された大川健三さんの案内で、「中国で一番美しい村・丹巴」を訪問しませんか。

■丹巴とは

本誌「わんりい」に季節折々の「四姑娘山・写真だより」を寄稿頂いたり、すばらしい「わんりい」の表紙写真でおなじみの、中国四川省在住の写真家・大川健三さんが、今年7月末のTBS番組「こんなところに日本人がいる」で紹介されました。ご覧になった方も多かったのではないのでしょうか。

大川健三さんは中国四川省の省都、成都から西へ約350km離れたチベット文化圏の甘孜チベット族自治州にある、丹巴に17年近く暮らしています。周辺の地形は山岳地帯で、秀峰四姑娘山が近くにあります。

TBSの番組では、漫画家の蛭子能収さんが、大川さんを訪ね当てるまでの長い道中は、爆笑の連続でした。旅の最後到大川さんが現れ、写真撮影や四姑娘山自然保護に関わった話を披露しました。彼はシルバーグレイの都会的なきちんとした家族思いの紳士である事にびっくりしました。大川さんについては、「わんりい」HP (<http://wanli-san.com/>) に「チベット族の聖なる山、四姑娘山」で世界自然遺産にも指定された四姑娘山自然保護地区の保全活動に力を注ぎ、既に17年近く住まれているらしいです。また、大川さんのエッセイ「四姑娘山・写真だより」は<http://wanli-san.com/ookawasan/essay-title.html>に掲載されていますので是非ご覧ください。中国離れたエキゾチックな風景をご覧いただけます。大川氏がお住まいの丹巴は「中国で一番美しい村」と呼ばれています。

さて前置きが長くなりましたが、番組を見た方々から、「是非、訪ねてみたい」との声が寄せられました。そこで大川氏に旅のコーディネートをお願いできるかどうかお伺いしたところ気持ち



よくご了解下さり、希望の多い4季節を候補として、「わんりい」のツアーとして旅を企画して頂けることになりました。

なお、大川氏はボランティアとしてご案内くださいますので、航空運賃を除く現地滞在費は僻地にも拘らず格安で設定くださっています。しかし、現地の事情で季節によって費用に差があります。取り敢えず、丹巴ツアーベストシーズンとして提示させていただきました、4季節のおおよその現地の状況と費用、及び滞在予定日数を次ページに掲載します。参加を希望される皆様のお申し出をお待ちし、その後、実施時期などをご相談して決めたいと思っています。参加できるかどうかは横に置いて関心のある皆様のご連絡をお待ちしています。

■問合せ：田井 ☎042-734-5100
E-mail : wanli@jcom.home.ne.jp

ご参加者6人で成都と丹巴での移動や滞在のおおよその宿泊交通食事全部の費用を計算しました。参加者3人の場合の費用は次頁の計算より少し増えます。また春節から小正月の訪問期間にも7日間のコースを加えてあります。

1. 色々な伝統舞踊を落ち着いて見られる春節から小正月(2017年は春節1月28日で元宵節は2月11日)

- ①春節時期の特別な交通事情のため、春節を丹巴で過ごす。この場合は、前々日の1月26日にバス等で成都から丹巴へ入る。丹巴のギャロンチベタンの民族色豊かな春節を一緒に過ごし、各地の集落参観と伝統行事や舞踊を3～4日間参観する。

合計20日間：約14万円

(春節期間は割高になる)

- ②丹巴での滞在期間を1週間程度にしたい場合は立春の2月3日にバス等で成都から丹巴へ入って元宵節月2月11日まで滞在し、各地の集落参観と伝統行事や舞踊を3～4日間参観する。

合計12日間：約10万円位(春節期間は割高になる)

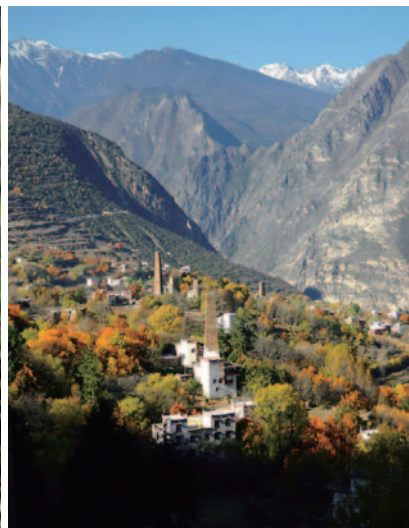
- ③2月8日にバス等で成都から丹巴へ入って元宵節月2月11日まで滞在し、各地の集落参観と伝統行事や舞踊を2～3日間参観する。

合計7日間：約7万円(春節期間は割高になる)

※上記いずれの場合も、成都へは2月12日に戻ります。



蘭の仲間が多く、緑濃い風景の5月末から6月初旬



11月後半は碉楼群に映える紅黄葉が美しい
ちょうろう



旧正月は伝統舞踊を見られます



梨の花が満開の丹巴。3月中旬の風景

2. 梨の花が満開の風景を見られる3月中旬。

3. 蘭の仲間の花が多く咲き始め緑濃い風景も見られる5月末から6月初旬。

4. 黄葉紅葉が広がる風景が見られる11月後半。

★上記 2. 3. 4. の日程は下記ようになります。

合計7日間の宿泊・交通・食事全部の滞在費用は、5万円位です。

■内訳

- ▲1日目： 成田17:25 NH947→22:20 成都(標高500m)、成都ホテル泊(2人部屋×3室)
- ▲2日目： 成都06:30～7:00→14:30 丹巴(標高2000m) 30分→甲居(標高2400m)
茶店子～丹巴移動(公共バス10座席)、町の中を参観してから民宿泊(2人部屋×3室)
- ▲3日目～5日目(3日間)： 民宿滞在。中路、頂果山寺、チョンシャンを参観。
ワゴン車2台で移動、民宿泊(2人部屋×3室)
- ▲6日目： 甲居05:30-0.5H→06:00 丹巴(標高2000m) 06:30-7H→成都(標高500m)
丹巴～茶店子移動(公共バス10座席)、成都ホテル泊(2人部屋×3室)
- ▲7日目： 成都 09:05 NH 948 → 成田 15:20

※丹巴の宿泊先は基本的に民宿で現地の生活に親しまいますが、春節以外ならご希望でしたら町のホテルも使えます。成都～丹巴はバスで約7時間(小型車で約5時間)です。丹巴では殆ど自動車移動して歩きは少ない予定です。

※全日空の東京～成都直行便も含めて、春節時期は航空料金が高いことが考えられます。

～皆様のご検討をお待ちしています～

剪紙体験

月日：2016年10月26日（水）

場所：三輪コミュニティセンター会議室

指導：何媛媛さん

今年も、町田市内で活動する団体による祭「まちカフェ」が、12月4日（日）町田市役所で開催される。昨年は初めての参加で、物品販売で様子見の参加だった。今年は、「わんりい」らしい内容で参加したいということで水墨画による干支の年賀状体験と剪紙体験のワークショップをすることにした。

「わんりい」に中国の物語を寄稿下さっていた何媛媛さんが、「子どもの頃に剪紙で遊んでいたのが簡単なものなら」といって指導を引き受けて下さった。とはいえ、果たして、私達自身がハサミでいろいろな模様や図形を切り出す事が出来るのでしょうか。「一度、体験してみませんか」との何さんのお誘いで、急遽、剪紙に興味のありそうな皆さんに声掛けし体験してみることにした。

図柄では簡単そうに見える剪紙でも、自分で剪ってみるとその難しさがよく分かった。が、ひたすらハサミの先に



神経を集中したとても良い時間だった。図形を切り出すのはなかなか高度な技術が必要だと知ったが、折り紙を幾重にも折り、自由に花模様を切り出す剪紙は広げるまでどのような模様になるか分からず、その意外性を楽しんだ。桜の花や四つ葉のクローバーの中に春を切り出して、これは初心者でも使えたと納得した。皆さん、まちカフェでは非ご一緒に剪紙体験を！（参照最終ページ）（田井光枝）

《「わんりい」掲示板》

劉 薇 来日30周年 クリスマスコンサート～情熱のスペインに魅せられて <http://liuwei-musics.com/music/index.html>

ピアノ：丸山滋 12月16日（金）19：00開演 銀座 王子ホール <http://www.ojihall.jp/> 前売：4500円（当日：5000円全席自由）

【演奏予定曲】・ヴァイオリンソナタ（グラナドス）・ツィゴイネルワイゼン（サラサーテ）・スペイン舞曲1番「はかなき人生より」（ファリャ＝クライスラー編）・スペインセレナーデ（グラズノフ）他

主催：エム・バイ・ミュージックス チケット問合せ：☎03-3789-6518 E-mail:mxmusics@nifty.com

◆わんりいの催し

中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

▲11月の講座：まちだ中央公民館8F 第7学習室

11月23日（祝）10：00～11：30

▲12月の講座：まちだ中央公民館6F 第3・第4学習室

12月18日（日）10：00～11：30

▲講師：植田渥雄先生

（現桜美林大学孔子学院講師）

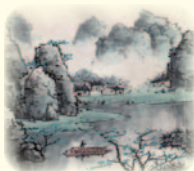
▲会費：1500円（会場使用料・講師謝礼など）

▲定員：20名（原則として）

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472（寺西）

E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp（有為楠）



◆わんりいの催し

ボイストレーニングをして 日本の歌を美しく歌おう！

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

▲11月29日（火） } まちだ中央公民館・音楽室

▲12月6日（火） }

▲時間 10：00～11：30

★動きやすい服装でご参加ください

●練習曲：「ひとつの種」

●講師：Emme（歌手）

●会費：1500円（会場使用料・講師謝礼など）

●定員：15名（原則として）

◆申込み：☎042-735-7187（鈴木）

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp（わんりい）



【2016年11月定例会・12月号「わんりい」発送日】

●11月の定例会：11月8日（火）13：30～（田井宅）

●12月号のおたより発行日：11月28日（月）10：30～ 三輪センター・第三会議室（弁当持参）

◆問合せ：☎042-319-6491（わんりい）

【わんりい・料理の会11月】 上海出身の宣芳(せん)さんの指導で

日本人の味覚にぴったり、上海家庭料理

2016年11月15日(火) 10:30～14:00 麻生市民館・料理室

上海周辺の地域は豊富な海産物と米を主体にした食生活を送っており、味付けも日本人好みのさっぱり味が多いようです。一味異なる上海料理を日常の食卓に加えてみましょう。講師は10月のチマキの会の指導で、好評頂いた宣芳さんです。

【メニュー】1. 炸香玲(豆腐皮包肉) 2. 清蒸魚&老豆腐(イシモチと豆腐蒸し物)
3. 粉絲鮮湯(春雨と小松菜のスープ) 他

- 参加会費：1,500円(講師謝礼・材料費・会場費) ※ 留学生は無料
- 募集人数：15名 ● 持ち物：エプロン、筆記用具
- ◆ 申込みと問合せ：☎042-734-5100 Email: wanli@jcom.home.ne.jp 田井



【わんりい・料理の会12月】 中国遼寧省出身の呉躍鳳さんの指導で

中国のお母さんの愛を味わう、簡単でとても美味しい中国のおやき

2016年12月12日(月) 10:30～14:00 麻生市民館・料理室

今年4月、'わんりい'会員の山田賀世さんが日本の太海苔巻の巻き方を留学生と私たちに指導頂きました。その時にご参加のイエリンさんのお母様が、お食後として焼いて下さったのが「糖酥餅」と「金絲餅」という中国のおやきでした。料理が飛び出す「不思議なテーブルかけ」を見ているように、鮮やかな手つきで焼いて下さいました。今回は、中国の代表的スナックともいえる、ニラ、玉子、海老(時にはお肉とキノコも)を包んで焼く「餡餅」を加えて、三種類の「餅」をご指導頂き、焼き立てをお昼*)として頂きます。

*)中華風スープ、サラダ、デザート付です。

- 参加会費：1,500円(講師謝礼 材料費 会場費) ※ 留学生は無料
- 募集人数：15名 ● 持ち物：エプロン、筆記用具
- ◆ 申込みと問合せ：☎042-734-5100 Email: wanli@jcom.home.ne.jp 'わんりい'



第20回「日中学院倉石賞」候補推薦のお願い

1951年、「日中学院」の前身「倉石中国語講習会」を創設した倉石氏は、1972年の日中国交正常化までの21年間、苦難、苦闘の歴史を歩みました。その間「中国語を学んで日中友好の架け橋になろう!」の旗印をかがげ中国語教育の普及と発展に力を注ぎ、日中友好の架け橋となる人材を多く輩出してきました。倉石先生の没後、ご遺族からの寄付金をもとに1989年に「倉石武四郎先生記念基金」を設けました。今年で第20回を迎えます。今年も多くの方々のご推薦を願っています。

第20回日中学院倉石賞推薦要項

- 対象：①民間中国語教育の普及・向上及び日中文化交流などに貢献した個人・団体 ②中国語の教育、研究、翻訳等に関する業績・著書・論文(在日本、中国を問わず)
- 募集締切：2016年11月30日(水)
- 授賞式：2017年2月中旬(予定) 賞状と賞金の授与
- 問合せ：03-3814-3591(日中学院倉石賞係)

e-mail:info@rizhong.org

日中口述歴史・文化研究会 設立10周年記念の催し

参加無料 ご自由にご参加ください

'わんりい'「漢詩の会」で、漢詩にまつわる楽しい講義をして頂いている植田渥雄先生を会長として、日中の口述歴史の研究発表を地道に続け、今年10周年になります。記念の催しとして、植田先生の講演及び、「日中戦争の真実」をテーマにシンポジウムなどがあります。

- 11月13日(日) 10:30～16:30(受付10:00)

- 会場：桜美林大学孔子学院 2F 202教室

* JR横浜線・淵野辺駅北口隣接

■【記念講演】 10:30～11:30

「中国最古の口述書『論語』から平和を考える」

講師：植田渥雄先生(日中口述歴史・文化研究会会長)

※今年5月、麻生市民館サークル祭で、「わんりい」の催しとしてお話しいただき、好評でした。ご参加出来なかった皆様、是非、この機会に! (参考: 'わんりい' 7月号22頁)

■【記念シンポジウム・日中戦争の真実】 13:20～16:30

- ▲ 問合せ: 080-5460-8710(崔貞)

全員集合!! 第19回 町田発国際ボランティア祭 2016夢広場 ～ この星に平和と希望を ～



熊本県大地震 被災地の子供達の、教育分野への温かな復興支援!

11月3日(祝) 10:00～16:00 於:まちなの駅「ぽっぽ町田」イベント広場

ステージでは、海外の踊りやパフォーマンス 今年、これまでとちょっと異なるプログラムがいっぱいです。特別ゲストとしてオーストラリア出身の女装パフォーマー・レディピアードさんが参加!「歌え!踊れ!破壊せよ!」とのキャッチコピーで、破天荒なヴィジュアルと前代未聞のミュージック!が楽しめます。'わんりい' ボイストレの会の講師・Emmeさんのボイス・トレ体験も是非! その他、見るだけでも楽しい、異国情緒溢れる雑貨 や食料の展示販売や世界各国の民族衣装体験ができます。

●問合せ: ☎042-722-4260 町田国際交流センター

●主催: 2016夢広場実行委員会 ●共催: (社福)町田市社会福祉協議会 / (一社)町田青年会議所

(公財)日本国際連合協会 世界児童画カレンダー 2017 申込は夢広場を以て締め切ります



第10回 市民協働フェスティバル「まちカフェ!」(2016年度)

<https://www.city.machida.tokyo.jp/community/shimin/event/machicafe2012.html>



市民協働フェスティバル「まちカフェ!」は、町田市内で活動するNPO法人や市民活動団体、地域活動団体(町内会・自治会)などが一堂に集い、活動発表などを通じて交流を深めるためのイベントです

●開催日: 2016年12月4日(日曜日)

●時間: 午前10時から午後4時まで

●場所: 町田市役所

●主題: 『「出会い」「知り合い」「深め合う」まちだ』

●主催: 第10回市民協働フェスティバル
「まちカフェ」実行委員会

●問合せ: 市民部 市民協働推進課 ☎042-724-4362



*昨年度は初めての参加で様子が分からず、物品販売と会の紹介で参加しました。今年は、「第10回まちカフェ」に足を運んで下さった皆さんと一緒に、中国水墨画年賀状(指導: 満柏画伯/日本水墨画協会会長)と中国風剪紙(指導: 何媛媛さん)のワークショップで楽しもうと予定しています。

参加費: 水墨画300円(ハガキ付) 剪紙体験100円(折り紙付)

初心者のための【鶴川水墨画教室】

体験のお誘い
来年の干支「鶏」を描いてみよう!

講師: 満柏(・日中水墨協会会長)

●場所: 鶴川市民センター(町田市大蔵町1981 駐車場有)

小田急線鶴川駅からバス
鶴川市民センター入り口下車

●曜日・時間: 14:00～16:00

●体験参加費: 1000円
(見学無料 手ぶらで参加OK)

●問合せ: 野島 ☎042-735-6135



■第12回日中水墨協会展(叶霖水彩画展同時開催)

神奈川県民ホールギャラリー <http://www.kanakengallery.com/>

11月15日(火)～20日(日)9:00～18:00

(初日=15:30～ 最終日=16:00まで)

'わんりい' 215号の主な目次

北京雑感(108) 北京のお土産	2
論語断片(21) 人而无信,不知其可也	3
大連・長春・丹東の旅(その2)	4
「漢詩の会」たより⑤「蜀相」	6
混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義Ⅷ	8
東西文明の比較(9)	10
わんりい活動・中国チマキの会	12
スリランカ紀行⑫ ビューティフルボランティア	14
フィリピン滞在記⑫誕生日を迎えて	16
中国で一番美しい村・丹巴(旅のお誘い)	18
わんりいの活動・剪紙体験	20
わんりい掲示板	20・21・22